

自己治癒アス技術研究に着手

オランダを訪問、修復状況確認

舗装インフラの長寿命化へ

大成ロテックら

大成ロテックは、會澤高圧コンクリート（北海道小牧市）と自己治癒アスファルト材料の開発に関する共同研究に着手した。11月に同社技術研究所の青木政樹第一研究

室長、會澤高圧コンクリートの中村聖二主席研究員らが、自己治癒アスファルト技術の開発者であるオランダのデルフト工科大学土木工学部のエリック・シユランゲン教授

を訪問し、材料の特性や強制修復のための加熱システム（インタクシジョンヒーリング）の実機の操作状況など、同技術の重要な項目に関する確認を行った。

自己治癒アスファルトは、加熱アスファルト混合物に、自己修復機能と特殊機器の加熱による強制修復の機能を持たせる材料を事前に配合しておくことで、供用後に発生

するひび割れを修復できるアスファルト舗装の長寿命化を図る技術。

自己修復に関する技術は、30年には世界市場が30兆円規模にもなるとされる分野として、塗料、コンクリート、ポリマー、フィルム、ゴム、ガラスなど様々な材料での研究が進められており、特に建設分野においては、インフラの長寿命化技術のひとつとして注目されている。

今回、両社はエリック・シユランゲン教授ら

と、同技術に関するディスカッションをはじめ、オランダ国内で同技術を適用した実際の道路での、アスファルト舗装のひび割れを修復する自己治癒メカニズムの実演にも立会い、材料の特性や強制修復のための加熱システム（インタクシジョンヒーリング）の実機の操作状況など、同技術の重要な項目に関する確認を行うことができた。

エリック・シユランゲン教授との連携強化がはかれたことから、今後、

定期的な情報共有のもとに、両社は、新たなビジネスモデルへの検討や、日本国内での実用性に向け研究を加速させて、舗装分野のインフラ長寿命化や、生産性の向上を図る技術の確立に取り組む。

また、同社は、今回の技術をはじめ、将来的に需要が高まるとされる舗装長寿命化に向けた様々な技術の研究開発に取り組む。国内・海外での舗装事業の底上げを図る考えだ。

